

新版 全国衛生研究所見聞記 **【其の2】** **愛知県衛生研究所の巻**



はじめに

某月某日午前9時58分、品川駅から新幹線に乗り、11時33分、名古屋駅に到着。モダンメディア編集部の大森女史と柴田氏も今回は無事に到着した。

駅前の『大名古屋ビルヂング』の看板が、今日も探訪子を微笑^{かつ}させてくれる。嘗て畏友溝上雅史^{いゆう}名古屋市大医学部教授は「あの恥ずかしい看板を一刻も早く撤去して欲しいと願っている」と述懐した。名古屋の前に『大』が付いているのと、『デ』ではなく『ヂ』と表記されているのが恥ずかしいとの由。その気持ちは解らぬでもないが、異邦人である探訪子の無責任な意見を云わせて貰えば、この看板こそ(金のシャチホコをも凌駕する)名古屋の大象徴である。何故なら、日本一元気な街と称されるまでに発展した名古屋を、この看板はずーっと見守り続け、鼓舞し続けて今日に至っているからだ。



写真1 探訪子はこのセンスが気に入っている

名古屋名物日本一は元気さやシャチホコだけではない。乗車したタクシーの運転手さん(森善明氏)によれば、街路樹『真珠の木』の本数も、これまた日本一なのだそうである。これから訪れる愛知県衛生研究所にはどんな『日本一』が秘められているのだろうか。

(I) 宮崎所長に珈琲を淹れて頂き、 茶飲み話に花が咲く

北区辻町にある愛知県衛生研究所の建物は昭和47年の竣工で、相応に古い様式で、前回訪問した神奈川県衛生研究所のネオモダニズム建築とは対照的に、如何にも『衛研』的な、地味で質素でしっとりとした落ち着きを漂わせていた。



写真2 愛知衛生研究所全景

森川保二企画情報部長に案内されて入った所長室で、初対面の宮崎豊所長は先ず、平凡で旧式のコーヒーメーカーを悠然たる仕草で操り、手ずから珈琲を淹れて探訪子達を歓迎してくださった。



写真3 宮崎所長から珈琲を御馳走して頂いた

風貌だけからしても充分『異色の人』である宮崎先生は、衛研所長としては随分変わった経歴の持ち主である。元は名大のカルディオロジストだったのだが、米国留学から帰国後に検疫所等を経由して此の道に入られた。名大の前は長崎県の諫早高校の野球部員だった。その更に前の前の前の幼稚園時代には、米国からセントルイス・カーギナルスが来日し、父君に連れられて平和台球場まで試合を見に行ったとの由。探訪子も幼年時代にスタン・ミュージアル（＝カーギナルスの中心選手の一人）が来日したことを記憶している田舎育ちの元野球少年だから、同じく元野球少年である宮崎先生との茶飲み話は延々と果てしなく続きそうだった。しかし、同席した森川部長の視線の行先が時折腕時計の方向に走るのを見るにつけ、我々老兵の昔話は程々に切り上げねばならぬと悟った。

「閑話休題、うちの年報は日本一早く発行されるんですよ」と宮崎所長。ウワッ、早くも出ました日本一！頂戴した平成16年度愛知県衛生研究所年報の奥付を見ると、平成17年6月30日発行と書いてある。確かに早い。しかし日本一か否かについては若干の疑念が残った。何故なら、全国に76箇所あるという衛研の中には、この日付より早く平成16年度の年報が発行された衛研が、ひょっとすると存在するかもしれないではないか。もしあれば、是非名乗り出て頂きたい。さすれば愛知衛研の次年度の年報が更に早く刊行されるであろうこと必定である。

（Ⅱ）所内見学のスタートは微生物部から： アイチウイルス等の発見話に探訪子は 吃驚し感服した

「最上階から順繰りに下降するというダンドリで所内めぐりをしませう」との森川部長の言葉に従い、自動昇降機に乗って最上階に行くと、其処は微生物部（のウイルス部門）だった。

榮賢司同部部長から色々説明を受けた中で、探訪子の興味を最も強く惹起したのは、アイチウイルス（Aichivirus）の話であった。その名が示唆する如く、そのウイルスは此の愛知衛研で発見されたウイルスである。自身がvirus hunterである（正確に云うと「であると思ひ込んでいる」）探訪子は、『新ウイルス』という言葉を開くだけで血が騒ぐ。ヒト

（下痢症の患者さん）から最初に分離され、最近ではウシからも分離された此のウイルスは、*Picornaviridae* の一種ではあるが超微形態的にも遺伝学的にも従来のピコルナとは異質のものであり、新たな属（＝genus）に分類すべき性質を持っていると、発見者である山下照夫主任研究員や榮部長達は考えていたが、国際的にも1999年にICTVがそのことを認知してくれて、コブウイルス（Kobuvirus）という新しい属名をAichivirusのために作ってくれた由。「新ウイルス発見とは実にめでたいですね。ところでKobuという名称は何処から来たのでしょうか？」という探訪子の質問に対して、「あっ、それは日本語のコブ（瘤）です。電顕写真でウイルス粒子を見ると、表面にボコボコと瘤があるように見えますからね」と榮部長。吃驚！種名にも属名にも日本語が使われているウイルスなんて、寡聞にして探訪子は聞いたことがない。感服した探訪子は心の内で『愛知鼓舞ウイルス』という別名を進呈した。

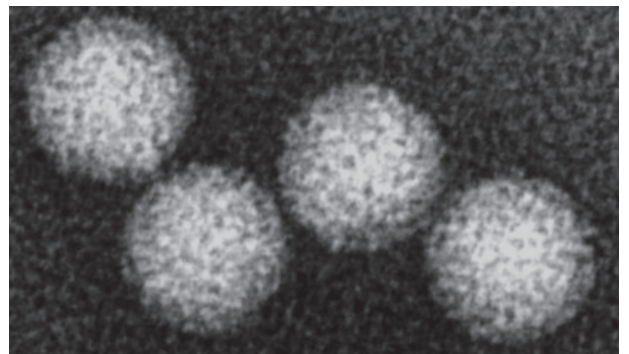


写真4 *Picornaviridae* 科 Kobuvirus 属 Aichivirus 種

吃驚させられたことは他にもある。愛知衛研のこのウイルス部門は、ヒト・パレコウイルス（HPeV）の中の新しいタイプのものを、一過性麻痺症状を呈した患児の便から発見している。愛知県内に棲息するイノシシから分離されたE型肝炎ウイルス（HEV）がgenotype IVであったという話も探訪子を吃驚させた。何故なら、本州でこれまでイノシシから分離報告されたHEVは、全てgenotype IIIだったからである。

かくて最上階では吃驚と感服の連続だったが、それはこのウイルス部門を離れ、一階降りて、細菌部門を訪れた後もまだまだ続いた。

(Ⅲ) 細菌部門の研究成果に衛研的研究の原点を見た

ヒトに腸管出血を惹起する強毒性大腸菌（Shiga-toxin producing *E. coli*, 略して STEC）として O157 は余りにも有名だが、O26 という大腸菌をば看過してはいけな。何故なら、O157 以外の STEC（= non-O157 STEC）のうち最も高頻度で検出されるのが此の O26 であるからだ。だとすれば、O26 を検出分離する為の簡便で特異的な系があらまほしい。食品微生物科の平松礼司主任研究員等は、O26 がラムノース非分解であることを発見し、他の大腸菌だと赤いコロニーになるが、O26 だけは白いコロニーを形成するような、新規の選択分離培地を考案し、開発し、特許申請し、遂には特許成立にまで漕ぎ着け、その培地は現在 4 社から製造販売されるに至っている。



写真5 CT-RMAC 培地上の O26 の白いコロニー

平松主研等の此の仕事こそ、実に全く『衛研的研究』の理想形ではないかと、探訪子は思った。O157 を主原因とする腸管出血性大腸菌感染が全国的に大発生した平成 8 年の翌年に、彼等は、愛知衛研に持ち込まれた検体を研究対象として、O26 の持つ特異な性質を発見し、それを基にして選択培地を開発し、それを世の中に製品として還元した。即ち、人間社会の中で生起した健康被害から出発し、調査研究を行い、その結果として、従前は存在しなかった有用な研究産物を人間社会に提供することを得たのである。

知的産物が世の中の役に立つ場合には、これを『実学』と称し、何の役にも立たない場合には『虚学』と称し、逆に世の中を害する結果につながる場合には『ブラック・サイエンス』と称するが、上記

した O26 選択培地の仕事は実学の御手本である。そして、特許は、実学の為にこそ存在する。

実学のもう一つの例、MRSA の型分類の新技術も愛知衛研で開発中である。特許出願中であるその技術の詳細を此处では述べる事が出来ないが、従来のパルスフィールドゲル電気泳動法よりは遥かに短時間（3～4 時間）で実施できるという利点をその新技術は持っている。



写真6 微生物部での記念撮影

(Ⅳ) 毒性部ではアサリ毒の話を聞き、麦茶を頂戴した

階段を降り、富田伴一部長の待ち受ける毒性部を訪れた。毒性部では、花粉、ダニ、パイロジェン、シックハウス、生体内重金属等を研究対象にしているが、今日はアサリ毒の話を伺うことにした。何と云っても此処愛知県は、アサリの生産高が日本一だからだ。

奥村正直毒性病理科長から、従来はマウスを使って麻痺性貝毒や下痢性貝毒の定量が行われてきたが、愛知衛研では細胞培養の系を用いて、もっと短時間且つ高感度でそれが出来るように研究を進めてきた、という説明を受けた。動物や細胞を用いずに分析機器だけを用いて行う定量も勿論可能なのであるが、標準品自体が猛毒だから、オイソレとはそれが出来ない事情がある。そういう制約の下では、矢張り奥村科長等によって開発されつつある細胞培養の系が現実的な有用性を発揮するのであった。

と、そのような話を聞いているうちに、冷えた麦茶の供応があった。地方や時代によっても違うだろうが、一定時間居続けた客に御茶が出されたり、近くの壁にさりげなく^{ほうき}箒が立てかけられたりした場合

には、何らかの『無言のメッセージ』を客は感じ取らなければならない。探訪子は鈍感だから何も感じることなく麦茶を飲んでいたが、やがて左隣の大森女史（モダンメディア）から一枚のメモが探訪子に手渡された。それは、『モダンメディアの取材について』と題されたA4版の紙で、今日の取材のタイム・テーブルが記されている。どれどれ、今は毒性部にいるんだから、とて指先でそのタイム・テーブルを上から下へと辿っていくと、『毒性部 14:30～14:45』と書いてある。おお、結構細かく予定が刻んであるなあと、どこまでも能天気な探訪子であったが、……

時刻は既に 15:00 を遥かに過ぎていたのであった。この後に生活科学部と化学部と企画情報部を訪問し最後に総括をして我々が愛知衛研から退去する時刻は 16:00 に設定されている。「いやあ、これは申し訳ないことをしました。ボクがノンビリしていたばかりに皆様に御迷惑を」と謝ろうとすると、「いえいえ、これは想定内の遅延ですから御気遣いなく」と、案内役の森川企画情報部長は微笑を湛えた涼やかな眼で優しく応じてくれた（これは後刻大森女史等と交わした内緒話であるが、森川部長の言った『想定内』というのは、きっと宮崎所長の話し好きによる遅延のことを意味していたに違いないという想像で我々の結論は一致した）。

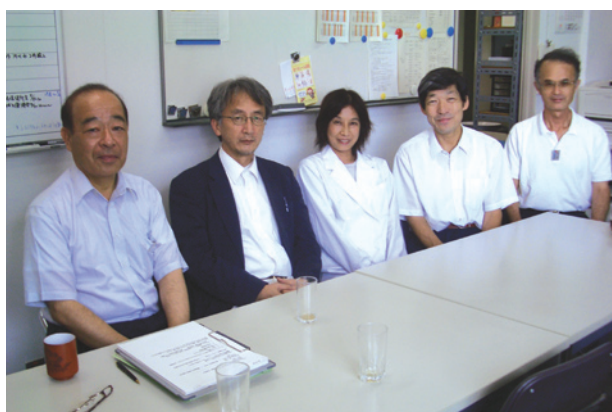


写真7 毒性部諸兄姉の集合写真

(V) 生活科学部には元全共闘の闘士だったかのような女性がいた

上述した如き理由で、我々はやや足早に階段を降り、松本浩部長率いる生活科学部へと向う。

生活科学部の調査研究対象は多岐にわたるが、今

日はもう時間がないからという理由で、温泉水の分析に関する話だけを聞くことになった。

「〇〇さん、取材だよ」と呼ばれる松本部長の声に応じて部屋の奥から出てきて我々の前に姿を現した人物は、首にタオルを巻きつけた精悍な面立ちの年齢不詳の女性である。「何でせうか？ 今日にはQ and A だけだと聞いてましたけど」と彼女。「ああそうでしたか」と探訪子。「どうぞ早く質問してください」と彼女。「では質問致します。あなたは何が理由で衛研に就職したのですか？」と探訪子。このQ に対する彼女のA の全てを此処に記す訳には行かないが、彼女の生年が探訪子のその一年前であること、大学を卒業後に生化学工業関係の某会社に就職するも一年で退職したこと等を知ることができた。要するに同世代。同世代人同士のみが共有し得る三十有余年前の記憶が忽然として彼女と探訪子の脳裡に同時に蘇り、我々は『衛研めぐり』とは全く無関係に戦友同士の握手をしてしまった。

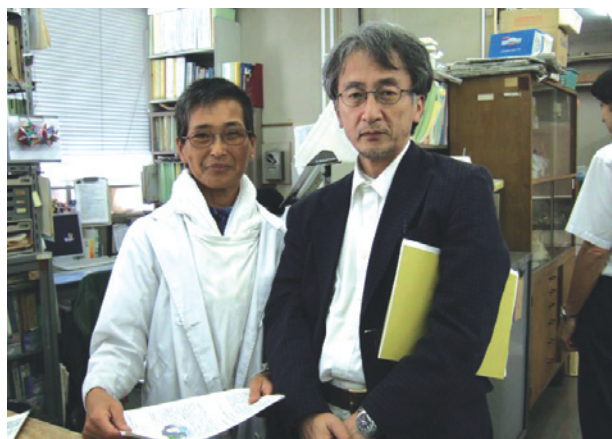


写真8 生活科学部のジャンヌダルク？こと大沼章子環境物理科長

勿論、彼女の専門である温泉水分析に関する話も聞いたが、その大凡を探訪子は忘却した。その代わり、今度来る時には美味しい赤ワインを土産に持参するという、今では理由不明の約束をしてしまったことを記憶している。

(VI) 化学部にて：集中力を次第に失い始めた探訪子の脳裡には Viagra の話だけが残った？

ああ、今は何階へ降りつつあるのだろうか、など

と思いつつ階段を下る。見れば、同行の宮崎所長の足取りもなんとなく怪しい。後で聞くと、宮崎先生は先年輕い脳梗塞を患い、その後遺症が今でも時々出るのだそうだ。病気なら仕方がないが、探訪子の如き健康人がこの程度のことでへばっているようでは情けない。まして、健康増進の為に、健康食品等に頼ったりしたらもっと情けない。幸いにして探訪子はそういうものには一切頼らず、寧ろ健康を損ねる原因になるかもしれないタバコや酒の愛好者だから、それにしてもよくやっている方だと「自分で自分を褒めてやりたい」気分であるぞ、などと妙な自己肯定をしながら化学部の部屋に入った。

大野勉薬品化学科長は、健康食品の今日的大問題の一つとして、「医薬品成分が含有されているケースが最近頻発している」ことを指摘した。医薬品は厳しい審査を受けて承認され販売を許可されるが、健康食品にはそのようなプロセスが必要とされていない。従って、例えば「原産国中国。製品名『都瑞』。原材料：サンシュユとしか表示されずに名古屋市内で販売されていた健康飲料が、実はバイアグラ（医薬品）を含有していたという真実は、愛知衛研で検査されて初めて分ったことなのである。



写真9 煙草の箱は物差し代わりに置いていただけなのだが



写真10 生活科学部・化学部合同記念写真

平成14年に中国製ダイエット食品で死者が出たという報道も記憶に新しい。大野科長等の調査によれば、少なからぬ数の中国製ダイエット食品から、甲状腺末やフェンフルラミンやN-ニトロソフェンフルラミン等の医薬品成分が検出されているという。健康というシアワセは、市販健康食品を購入することによりたやすく得られるようなシロモノでは断じてない。寧ろそれは危険な行為ですらある。という認識をもっと世の中に広めるべきであろう。タバコの箱に「喫煙はあなたの健康を害する可能性云々」と表示するぐらいなら、全ての健康食品に「健康食品はあなたの健康を害する可能性云々」と表示させてはどうだろうか、探訪子は愚考する。

(Ⅶ) 企画情報部でウェブサイトの説明を受けた探訪子は、拙稿を読む時間があるくらいなら愛知衛研のホームページを御覧あれ!と呟く

階段を……いやもうこのリフレインは止めしよう。とにかく遂に2階まで辿り着いた。

森川部長率いる企画情報部はコンピュータールームである。現今の如き電子情報化時代が訪れる前の時代のこの部屋は、きっと薄暗き書庫のような部屋だったのではなかろうか。「〇〇君、あの資料を出してくれないか」と上司が云うと、「一寸御待ち下さい」と答えた部下の女性が、書架の谷間に潜り込み、目的の資料が含まれている紐綴じのファイルを見つけ出し、手で埃を払いながら「ありました。これです」と持って来る。それまでの数分間、上司は紫煙を燻らせながら中日新聞スポーツ欄の名古屋金鯱軍の記事に目を落とす。……いかんいかん、探訪子は白昼夢を見始めた。

閑話休題、今はコンピューター時代、全国76箇所の衛生研究所の全てが夫々のホームページを持っているのではなかろうか。その中で、この愛知衛研のホームページは、ひょっとすると日本一かもしれない。例えば、先々代所長の磯村先生が隔週この企画情報部を訪れ、WHO World Weekly Reportを「ちょこちょこっと翻訳して行かれ」（山口通代主任研究員談）、それが『WHO疫学週報抜粋抄訳』として掲載されているという硬派的生真面目さが存在する一方で、『温泉ってなあに?』という漫画付きのページもある。総じて、所員が（OBも）積極的に

協力してこのホームページを育てている、そういう印象を探訪子は抱いた。<http://www.pref.aichi.jp/eiseiken/>を是非とも一度は御覧になって頂きたい。

ただ一つだけ敢えて苦言を呈しておきたいことがある。愛知衛研のホームページは縦長なのである。しかし世の中の大凡のパソコン画面は横長なのである。従って、左右に空白のスペースが出来て勿体ない（前回訪問した神奈川衛研のは空白スペースが無い）。また、縦長だから頻繁に上下にスクロールせねばならない。探訪子の如き老人は、画面をスクロールする毎に眩暈を覚える。しかしこれは単なる『老人の繰言』だから無視して頂いて結構。



写真 11 企画情報部記念写真

（Ⅷ）フリダシに戻って再び所長室

所内ツアーにずっと同行していた終始無言の小柄痩身年齢不詳の人物が木村隆研究監であることに、ここで漸く気が付いた。木村先生も一風変わった経歴の持ち主で、専ら外務省畑を渡り歩いてきた人である。『研究監』という職名も不思議だったが、木村先生という人物も同じく不思議である。不思議といえば、宮崎所長も相当に不思議な人である。不思議な人達がトップにいと、その下の人達が一所懸命仕事するという法則があるのかなのか知らないが、愛知衛研は本当によく仕事していると探訪子は思った。

こんな図々しいことを思ったり書いたりもする探訪子を温かく迎え入れてくださった宮崎所長、木村研究監、森川部長そのほかの皆様に感謝しつつ、また辞去すべき時刻を大幅に過ぎてしまっていること

を深く御詫びしつつ、夕刻6時、探訪子とモダンメディア編集部員二名は、愛知衛研の玄関先から名古屋の街中へと消えて行った。



写真 12 愛知衛研幹部

おわりに

訪問を了えた探訪子たちは、その足で、名古屋市内某所で急ぎの反省会を開いた。探訪子以外の二名は20時の新幹線で東京に戻らねばならないから、この反省会は相当に忙しかった。

最初に飲んだ麦酒は異常に不味かった。三人が一致して不味いと感じた。愛知衛研にサンプルを持ち込もうかと思ったほどに不味かった。

急遽日本酒に変更して、全国彼方此方の酒をトッカエヒッカエ立て続けに飲んだ。美味しかったが感激するほどではなかった。

最後にヒツマブシを食べた。三人が顔を見合わせた。ワサビと鰻がこんなに相性のよい組み合わせだったとは、嗚呼、こんなに美味しいものを食べることが出来て我々は幸せだ、と三人は声に出した。

「これの何処が『反省会』なのだ、ケシカラン！」と後で非難されるであろうことを忘れ、三人は単純に幸福になり、19:30に会を閉じた。

名古屋駅へ行く二人を見送り、残った探訪子は単独反省会を開催し、その夜は名古屋に泊り、翌日は犬山へと、まだまだ反省の旅は続いていくのであった。

（探訪子＝東芝病院研究部 部長 三代俊治）